

# フランソワ・ラブレーの作品に見る 近代軍事革命

石橋正孝

## 序

本稿では、フランソワ・ラブレー（1483-1553）の前期二作品、『パンタグリュエル』、『ガルガンチュワ』における戦争描写を近代軍事革命の文脈で読み直し、実際の戦術変化をラブレーの作品と照合していく。

ラブレーの作品の軍事的側面についての研究は、『ガルガンチュワ』におけるピコロコル戦争に関して、すでに1907年に S.-C. Gigon が作品中に出てくる戦闘ユニット、武器の用語、戦闘の舞台などの精細な資料的裏付けを行っている<sup>(1)</sup>。しかしながら、そこで示されていることは、ラブレーが軍事用語に精通していたということと、仮説としてのラブレーの愛国主義的要素の強調であり、議論としての価値は現在では失われている。以来、ラブレーにおける軍事的描写に関する研究はほとんど扱われたことがない。むしろ、事実上放置されてきた感が否めない。したがって、まずこうした背景について、ラブレー研究の系譜と軍事史の関係に対する考察が必要となる。

ラブレーの描く巨人物語は『パンタグリュエル』（1532）、『ガルガンチュワ』（1534）、『第三の書』（1546）、『第四の書』（1552）、死後出版で真偽の確定していない『第五の書』（1564）があるが、時期・作風で30年代の最初の二作品と40年代以降の作品に大きく二つに分けることができる。フランソワ1世の庇護のもとで比較的自由的な作風を謳歌した前期に比べて、プロテスタントの台頭によ

る宗教対立の緊張の高まりと、ソルボンヌ神学部・ローマ・カトリックとの対立から、弾圧を恐れて社会風刺・体制批判もより難解・晦渋なスタイルになっていく後期ではかなり作風が異なる。一般的に受け入れられているラブレーの作品のイメージは、前者を中心としたものとなっている。

もともと、中世のブルターニュ民間伝承の中の巨人物語を題材とした「ガルガンチュワ大年代記<sup>(2)</sup>」の続編の意味合いでラブレーが『パンタグリユエル』を書くことになるが、その成功から改めて父親の物語である『ガルガンチュワ』を書くことになる。系譜的に第一の書の『ガルガンチュワ』が第二の書の『パンタグリユエル』の後に書かれたのはそのためである。

ラブレーの作品が過去5世紀にわたって受容されてきた際のイメージは、社会一般、すなわち作品を読んでない前提で受容されているものとしては、大食漢の巨人の滑稽物語であり、また、実際に作品を読んだ読者層にとってはM. バフチンがグロテスク・リアリズムと呼ぶところ<sup>(3)</sup>の文化・肉体の「下」の部分に関しての誇張表現と、その下に隠された晦渋な人文主義的メッセージ探しが中心となるだろう。

このように、研究者にとっても大まかに人文主義と文化人類学的構造主義の二大潮流のどちらに重点を置くかでアプローチを大きく二分することができる。人文主義的読み方の代表としては、イギリス人のカトリック神父であるM. スクリーチの研究<sup>(4)</sup>、また人類学的、民間伝承のアプローチとしてはロシアのM. バフチンの研究<sup>(5)</sup>がそれぞれを代表する双璧の包括的研究として存在してきた。

二つの主要な包括的研究がいずれもフランス人ではなくロシア人、イギリス人によってなされると、ラブレー研究のすそ野が広がり、1922年以来70年ぶりの本格的なラブレー全集がM. ユシヨンの校正により1994年に出版され<sup>(6)</sup>、M.-M. フラゴナールの現代語訳も2017年に出て<sup>(7)</sup>、21世紀に入り、一般的に受容されてきた大食漢の巨人の糞尿譚というだけのイメージを払拭するように、これまでの研究の集大成としてラブレーの全体像をとらえる<sup>(8)</sup>時期に来ているように見える。

こうしたラブレー研究の流れの中で、必然的に多くの研究アプローチがスクリーチ-バフチンの二大潮流にからめとられる形となっていた。とはいえ、この二つの潮流でラブレーの作品のすべての要素がくみ取れるわけではない。代表的な反例の一つが『パンタグリユエル』、『ガルガンチュワ』での詳細な戦闘描写であり、その背景としての16世紀ヨーロッパの軍事史であるといえる。

逆の言い方をすると、16世紀軍事史が歴史的意義を与えられるようになったのは1956年に M. ロバートが近代軍事革命の意義を最初に提唱し、G. パーカーによってあらためて1976年に取り上げられて以来<sup>(9)</sup>、比較的最近のことであり、ラブレーの作品の戦争描写も、S.-C. Gigon の用語解説にとどまらず、こうした軍事革命の視点からの新しい読み方をしなければならなくなっているのである。

この近代軍事革命の意義とは、銃火器の進化が戦場での決定的要因となるにつれて、国家はより大きな投資を軍事技術の発展に投じるようになり、より大きな財政負担がかかるようになる。すなわち、火器の発達が、近代化と国家の官僚機構の巨大化を促進させるという考え方である。

## 戦争の世紀：イタリア戦争，宗教戦争

実際、前世紀に火器が発明され、徐々に進化をとげ普及を始めた16世紀のヨーロッパは、いたるところで、絶え間なく戦争が起きていた。実に95パーセントの期間が戦争に費やされ、ほぼ3年間隔でヨーロッパのどこかで戦争が起きていた<sup>(10)</sup>。その中でもとりわけフランスは、15世紀末から60年以上にわたるイタリア戦争（1494-1559）に始まり、続けて直後に起こった宗教戦争（1562-1598）とで16世紀は占められており、その継続期間、その規模を含めて、16世紀はまさに「戦争の世紀」<sup>(11)</sup>とよぶことができる。

### イタリア戦争の背景：フランス統一

16世紀前半を占めるイタリア戦争の政治的背景としては、第一に国内の安定

が挙げられる。15世紀半ばまで続いたイギリスとの100年戦争（1337～60, 1415～1453）とペストの流行は、フランスに対しては国土の荒廃と同時に、封建領主の権力を大きく疲弊させるという副次的効果をヴァロワ家にもたらした。この機を生かして、その後の40年ほどの間に、ヴァロワ王朝はフランス全土に群雄割拠の状態であった封建領主の制圧を着実に進めていった。神聖ローマ帝国に属し、反フランスの代表格ともいえたブルゴーニュ伯は、1488年にルイ11世に敗れ、1491年にシャルル8世がアンヌ・ド・ブルターニュと結婚してブルターニュを手に入れるとフランス全土がほぼ制圧されることになる<sup>(12)</sup>。また、封建勢力を制圧したとはいえ、いまだ不安定な国内秩序を安定させるには、対外戦争は戦略的に重要な役割を担ってくれた。不満分子の目を外に向け、大規模軍事戦争のロジスティックの実践を通して、法服貴族と呼ばれる新興ブルジョワ階級を中心とした官僚機構を整備することもできた。こうして、国内の反乱を恐れることなく、政治的・社会的安定という副次的効用も担う形で、対外進出をうかがう機は熟したといえることができる。

第二に、イタリア戦争の最も直接的要因として、北イタリアのもつ地理要件がある。フランスの16世紀の対外領土政策の最重要課題は、パリに次ぐ第二の経済都市のリヨンを守ることにあった。経済的要衝であるリヨンへの緩衝地帯を少しでも拡大するために、隣接するイタリア北部の獲得が必要であった<sup>(13)</sup>。

半世紀に渡ったこの戦争はフランスの敗北に終わるが、文化的にはこのイタリア戦争をきっかけに、政治的・社会的に安定期に入りつつあった<sup>(14)</sup>フランス国内に、イタリア・ルネサンスを流入させ、フランス・ルネサンスをもたらすことになる。フランス・ルネサンスの最盛期に生まれた『パンタグリユエル』と『ガルガンチュワ』には、必然的にこうした政治的枠組み・歴史的事件への言及・暗示を多く見出すことができる。主人公のガルガンチュワ、パンタグリユエルにはフランソワ1世、敵として登場するピクロコル、ディプソードには宿敵として神聖ローマ帝国のカール5世をモデルとして読むことができるが、16世紀の生き証人として軍事史をつづった軍人のモンリュックによれば、ヴァロワ家のフランソワ1世とハプスブルグ家のカール5世のライバル関係は、

「宿敵として、相手の偉大さへの妬みも拍車をかけて、20万人の兵士と百万の家族を破滅させた<sup>(15)</sup>」ほどに、大きな犠牲を払うライバル関係となっていた。

半世紀に渡り断続的に続いたこの戦いは全体として大きく二つの局面に分けてみることができる。第一の局面は、1515年のマリニャンにおけるフランスの勝利と武器工房として有名なミラノの獲得であり、カール5世の神聖ローマ帝国・スイス連合に対するフランス軍の軍事的優位が示された戦いである。また、中世からのフランス軍の主力となっていた重騎士部隊の最後の栄光となった戦いである。

第二の局面は1525年のパヴィアにおけるフランス軍の歴史的敗北においてフランソワ1世が捕虜となった事件である<sup>(16)</sup>。ここで、フランス軍の重騎士部隊は惨敗を喫し、中世までのフランス騎士の軍事的名声に終止符が打たれることになる。以後は、神聖ローマ帝国に優位に戦局が進み、フランソワ1世の死後1549年に跡を継いだアンリ2世は、1559年のカトー・カンブレシス条約でイタリアに対する影響力を完全に失うことになる。

### 軍事革命：火器の発明

このように、イタリア戦争はヴァロワ家とハプスブルク家の代理戦争の場となり、半世紀に渡った絶え間ない戦いは、封建的軍隊の近代化を絶えず促進し、逆に戦争は科学技術の絶え間ない進化の場を提供し続けることとなった。J. ブラックが指摘するように、戦争というのはまさに、必要にかられて技術の進歩が促進されていく現場であり、とりわけ戦術、医学、工学、化学の分野での技術促進が促される土壌を提供していたのである<sup>(17)</sup>。ルネサンス人として多くの学問に精通していたラブレーは、デュ・ベレー公に付いて諜報員としてイタリアに何度も滞在し<sup>(18)</sup>、イタリア戦争でみられた軍事的近代化を目の当たりにして、それを作品に反映させたことはある意味当然のことであった。

「世に普及している優雅にして精緻な印刷術は、神的靈感により我が時代に発明されたものであり、一方で悪魔の教唆で発明されたものが火砲である<sup>(19)</sup>。」

16世紀前半のフランス・ルネサンス、ユマニズムの真髄を表している、ガルガンチュワからパンタグリュエルに宛てた手紙の中で、火器と活版印刷の二大発明の対比がなされていたが、印刷術同様に前世紀には発明されていた火器が16世紀には火力・射程の両面で改善され、とりわけ射程の改善により、対陣する敵との距離が大きく広がることになる。この陣営を構える際のお互いの空間的距離の広がり、それまで戦場の主役であった重騎士を時代遅れなものとし、封建貴族として中世フランスに群雄割拠していた貴族階級は力の優位を失い、王宮に集う宮廷貴族へと没落していく。この火器のもたらした戦場での一大変化は、戦術・戦略の変化のみならず、社会秩序にも変化をもたらしたのである。E. ガランが指摘する通りに、戦争における変化が社会の変化をそのまま表していたのが16世紀であった<sup>(20)</sup>。

同時に、ガルガンチュワからパンタグリュエルに宛てた手紙の終わりの方には以下のような記述も見いだされる。

「要するに、お前には今のうちに広大で深淵な知識を身に着けてほしいのだ。なぜなら、やがて成人して年を重ねた時には、この穏やかで安息な学問の暮らしから抜け出て、騎士道および武器の扱いを学び、悪人たちの攻撃から我が家を守り、何事につけわれらが友人たちを助けに行かねばならないのだ<sup>(21)</sup>。」

人文主義者として平和と寛容を唱えたエラスムスに崇拜の念を隠さなかったラブレーであるが、その一連の巨人物語における戦闘場面とそこでの身体描写には、戦争の残酷さに対する忌避はなく、むしろ逆に必要であるならば戦いを積極的に肯定する姿勢がうかがえる。ここに、ラブレー研究の陥りがちな罠がある。上述したようにバフチン的な民衆文化の系譜、スクリーチ的な人文主義的な知の系譜に収まってしまった研究アプローチでは、こうしたラブレーの軍事を肯定する面は人文主義者のレッテルと折り合いが悪く、それがいずれの研究の系譜からもラブレーの軍事面が放置されてしまった理由といえるだろう。

## マリニャンの勝利 1515：鉾槍兵（hallebardier）の登場

「神よ、バイヤールに祝福あれ<sup>(22)</sup>」

1515年のマリニャンの戦いにおいては、フランスはスイス連邦軍に対して華々しい大勝利をあげた。これは、伝統あるフランス騎士道の最後の輝きであり、まさに中世騎士道を体現した英雄バイヤールの目覚ましい活躍に代表されるような、重騎士ユニットで構成される軍隊の最後の舞台となった。重騎士団は、騎士そのものが重戦車のような武器の役割を担い、馬ともども鎧で覆われた騎士の長槍による突撃は、騎馬が加速装置の役割を担い、騎士は長槍を固定し照準を定める砲塔の役割であった。一度敵陣に到達すると、この突撃戦車は敵に壊滅的な打撃を与えることになった。イタリア戦争の前と初期においては、すべての陸上兵器の開発はこの戦場でもっとも恐ろしい兵器である重騎士をいかに攻略するかに集約されていた。

しかしながらマリニャンの戦いでは、フランス軍重騎士団の勝利には、大砲と歩兵の働きが欠かせなかった。「ガルガンチュワ」において、修道士ジャンがピコロコル軍の騎士隊長の突撃を止めるシーンには、当時の歩兵優位と騎士殺しの様子が、ラブレー特有の誇張表現の中にも見出せる：

「(…) ただ一人、ティラヴァン隊長だけは、長槍を固定して低く構え、修道士の胸の真ん中に全身の力を込めて突いた。しかし、この恐るべき僧服に触れると、あたかも小さな蠟燭で鉄床を叩いたかのように鉄の刃先がぐしゃっと潰れてしまった。それに対して修道士は十字の棍棒でティラヴァンの襟元から肩の間に激しい一撃を加えたため、ティラヴァンはその衝撃で一瞬にして動きが止まり、馬の足もとへと落下した<sup>(23)</sup>。」

マリニャンの戦いにおいてフランス軍と直接戦ったのは、カール5世と連合したスイス連邦長槍歩兵隊<sup>(24)</sup>であったが、これは長槍歩兵（piquier）と鉾槍歩兵

(hallebardier) の混成体であり、コンパクトな四角形の密集隊形をつくる壁から剣山のように突き出し長槍 (pique) は、フランス重騎兵団の突撃を阻止するには極めて有効であった。スイスの長槍隊とそれを模倣してカール5世の父親であるマクシミリアン1世が創設した神聖ローマ帝国軍の長槍密集隊であるランスクネ (lansquenets) 隊の戦術は、四角い密集隊形の外側に長槍隊 (piquiers) を配置し、中央に鉾槍隊 (hallebardiers) を配置することで、長槍をハリネズミのように外に向けて全方位から重騎士の突撃を止め、一度突撃を阻止されて停止した重騎士を今度は内側に配置されていた鉾槍兵 (hallebardiers) が複雑に入り組んだ刃を騎士の鎧の襟首にひっかけて、まさにジャン修道士がしたように騎馬から引きずり下ろし、囲んで虐殺するというものだった。そのため、長槍隊 (piquiers) の長槍 (pique) は、固いトネリコ材で18フィート (5.83メートル) の長さを持ち、騎士の長槍 (lance) が自分に届く前に敵の騎馬の胸に届くように作られていた<sup>(25)</sup>。

一方の重騎士の方は、1515年、マリニャンの戦い当時の騎士の甲冑の装甲は、足の先から頭までの完全装備で40キロから50キロの重さに達していた。さらに、40キロの重さの槍 (joute) を腋に固定して敵陣地に自らが砲弾となり突撃していくのである<sup>(26)</sup>。この最大で90キロにもなる武装一式の重さは、当然のことながら戦闘の際の正確な動きを保つために極めて大きな力と技術を必要としたのであり、現実問題として日常から常に鍛錬に専念でき、高価な甲冑を揃えることのできる特権的貴族階級でなければ戦闘ユニットとして機能させることは不可能であった。したがって、重騎士という戦闘ユニットは必然的に貴族階級、中でも封建領主として収入が十分の貴族のみに許されたものであった。

ここで留意すべき点は、貴族階級の騎兵と平民階級の歩兵の間の憎悪の感情である。敵の騎士相手には寛容の美徳を発揮したバイヤールも、火縄銃の銃手は容赦なく全員絞首刑にしたように、一度捉えられたら騎士に殺されることが確実な歩兵の側も、禍根を残さぬよう、騎馬から引きずり下ろした騎士を確実に殺していたのである。ラブレーの戦闘シーンに見る残虐性は、敵への敬意を示すという騎士道が平民階級の歩兵には適用されないことが挙げられると同時



に、フランスにおける平民階級と貴族階級の間の戦場における憎悪の感情が背景にあることも見逃してはならない。

また一方で、フランス軍の重騎士の殺戮に猛威を振るったスイス鉾槍兵団も、大砲の火力の前には無力であり、彼らと同じ武装をしている敵歩兵の密集隊形に対しても有効な攻撃力を持たなかった。同じ歩兵部隊の中でも、これが銃兵隊と鉾槍隊の違いであり、J.-H. ヘイルが指摘するように、以降の戦場は銃兵隊が主力となる<sup>(27)</sup>。結果として、火縄銃で武装した歩兵隊、もしくは火縄銃手部隊を後方部隊として備える歩兵部隊は、多くの戦いにおいて騎士軍団を撃破する主役を担い、騎兵隊は後方支援、もしくは背後からの奇襲のために少数が歩兵部隊を補佐する形となっていた。

こうして歩兵隊が貴族の重騎士に対して優位をもつことがマリニヤンの戦いで示されて、10年後のパヴィアの戦いを迎えることになる。結果的に、フランス軍はカール5世の軍に「貴族の大殺戮<sup>(28)</sup>」と呼ばれた大敗北を喫することになる。

### パヴィアの敗北 1525：軽騎兵の台頭と規律の重要性

「パヴィアの戦いの逃亡兵などは、耳や尻尾を切った犬同然に去勢してくれよう。どうせ臆病熱が続くだけだ。彼らの親愛なる王様を置き去りにしてあのような苦境に置くらいなら、なぜその場で死のうとしないのか。卑劣にも逃げて生き延びるくらいなら、勇敢に戦って死んだ方が、よほど名誉で優れたことであろうに<sup>(29)</sup>。」

フランスが大敗してフランソワI世が捕虜となったパヴィアの戦いについて、ジャン修道士はこのように戦場から逃走した兵への憤りをみせる。このパヴィアの脱走兵への侮蔑は、修道士に代弁させて当時の貴族階級の誇りを示すと同時に、戦場で潰走した平民傭兵への侮蔑を示しているのである。そしてこの階級蔑視は、フランス軍の近代化を神聖ローマ帝国軍より遅らせる要因の一つとなる。

マリニャンからパヴィアの10年の間に、戦闘ユニットとしての騎士の戦術的重要性の低下は決定的となった<sup>(30)</sup>。イタリア戦争を開始したころのシャルル8世の軍隊は三分の二が長槍で武装した重騎兵で構成されていたが、パヴィアの戦いの時のフランソワ一世の軍隊では、全体の五分之一に過ぎず、それも徐々に火器、歩兵にとってかわられることになる。この意味でまさに、パヴィアの戦いはまさに、中世騎士文化の終焉を象徴する戦いであったといえる。パヴィアの9年後の1534年のガルガンチュワの中では、グラングジエの軍隊構成には、その変化がはっきり示されている。

「兵士の数は、一万五千の重騎兵、三万二千の軽騎兵、八万九千の火縄銃手、十四万の傭兵、一万一千二百門のカノン砲、バジリク砲、スピロル砲、四万七千の砲手がおり、すべて六か月と四日間分の給料は支払い済みだったし、その分の食糧も補給されていた<sup>(31)</sup>。」

合計334200の軍隊のうち、重騎士はわずか15000のみであり、全体の五分之一、すなわちパヴィアの戦いの構成と一致している。また、給料が払い済みというところからわかるとおり、軍が傭兵で構成されている点も、当時の実際の軍隊構成を忠実に反映したものとなっている。それでも、フランスは中世よりヨーロッパに勇名をとどろかせた騎士団の誇りを捨てることができない間に、カール5世のスペイン・神聖ローマ帝国軍は、より一層の近代化を進め、戦場での優位をすでに失っていた騎士ユニットよりも、歩兵隊の強化に重点をおいたのである<sup>(32)</sup>。

この理由は、フランス軍の中に騎士道精神とその誇りが強く残り、歩兵重視の軍隊への改革に精神的な抵抗が強かったのに対して、スペイン・神聖ローマ帝国ではフランスと異なり「歩兵＝平民に対する貴族の侮蔑」が存在していなかったことが大きい<sup>(33)</sup>。加えて、スペイン軍はフランス軍だけではなくグラナダ戦争におけるナスル朝との戦いで、軽騎兵と歩兵の重要性を理解していたのである。

しかしながら、フランスにおいては精神的支柱としていまだ戦場の主役であった重騎兵からは、直接対決をしない遠隔攻撃ユニットの倫理的「卑劣さ」への侮蔑は強く、バイヤールは捉えた火縄銃手<sup>(34)</sup>をすべて絞首刑にしていた。騎士道の鏡と言われていたバイヤールが1524年、パヴィアの戦いの前年に火縄銃の銃弾で命を落とすことは、騎士道の象徴的終焉としてみることができるだろう。一方で、フランソワ1世と対峙するカール5世を念頭においてラブレーが描いたディプソード軍の軍隊編成は、この10年間の戦術的大転換を反映している。:

「…わが軍には三百人の巨人がおり、いずれも建築用の切り石で身を固め、驚くべきほどの大きさです。とはいえ、一人を除いては閣下ほどの大きさには及びません。その一人とは、狼男の名を持ち巨人族の長をしている者で、この者は一目巨人ほど大きな鉄床で全身を包んでおります。また、十六万三千の歩兵はみな小悪魔リュタンの皮で身を固め、いずれも力と武勇に優れております。また、一万一千四百の騎兵、三千六百門の二重カノン砲、数限りもない弩銃砲は数え切れぬほど、九万四千人の工兵がおります<sup>(35)</sup>。」

ラブレー特有の空想と写実の混交の中で、写実の部分を読み解く必要があるが、重量級の鎧で全身を包むのは、巨人と頭目の狼男のみで、注目すべきは「十六万三千もの歩兵」は「小悪魔リュタンの皮」という巨人たちとは異なる軽い武装であることで、また歩兵の十分の一以下の「一万一千四百」の騎兵隊は歩兵たちの後に列挙されることである。歩兵は軽装であり、騎兵隊よりも重視されているのだ。そして多数の火器をそろえたこの近代的な軍隊構成は、戦場での時空間の概念を大きく変えることになる。「三千六百門」の二重カノン砲を構えた敵陣に到達するためには、兵たちは、より遠い射程から攻撃を開始し、敵陣に到達するまでの距離はますます広がり到達するのが難しくなっていく。結果として、敵陣に到達するためのユニットの移動速度が勝敗を決める決定的な要因の一つとなるのである。そこでは、「一目巨人ほど大きな鉄床で全身を包

んで」いては、速度が落ちて敵陣に到達する前に粉碎されてしまうので、歩兵隊は「小悪魔リュタンの皮で身を固め」た軽装で速度を重視している。

マリニャンの戦いの時のフランスの騎士のように90キロもの装甲をまとった騎士の突撃は、火器によって拡大した戦闘空間の中で敵陣に到達する前に粉碎されてしまうことになる。D. マッカーシーが指摘する通り<sup>(36)</sup>、火器の発明で戦場での移動速度が重視されるようになる中で、馬の甲冑を外し速度を取り戻した軽騎兵は戦場で再び機能するようになるのであり、15世紀後半から16世紀前半にかけて、緩やかに、しかし着実に軽騎兵の数が重騎兵の数を上回るようになった<sup>(37)</sup>。パヴィアの戦いでこの事実を受け入れざるを得なくなったフランス軍は、以後は中世からのフランス軍の誇りであった重騎士軍団をあきらめ、速度重視の軽騎兵を事実上の騎馬隊の主力とすることになる。

また、騎兵の役割の転換と同時に見逃せないのが、戦術における指揮官の判断の重要性と指揮官の指令に従う軍隊の規律である。

「敵兵は規律も秩序もなく潰走し始めた。部下の数人の兵は、退却する敵兵を追撃しようとしたが、修道士は引き止めた。なぜなら、追走して隊列を乱すことで、城中の敵軍からの逆襲を蒙ることをおそれたからであった。修道士はその後しばらく待ち構えていたが、向かって来る敵兵が誰もいないのを確かめてから、フロンティスト公爵をガルガンチュワのもとに送り、軍を進めて城門からピクロコルが退却するのを防ぐようにとすすめた。ガルガンチュワは急いでそのとおりに兵を動かし、セバスト將軍麾下の四軍団を派遣した<sup>(38)</sup>。」

ジャン修道士は、逃げようとする敵を追走する部下を引き留め、「戦列をみだし」てしまうことを禁じ、戦況から判断して上官のガルガンチュワに進言をする。戦術の中心にあるのが、指揮官としての判断能力と司令官のガルガンチュワとの連携である点が注目になる。戦場においてはすでに、個々に武勇を発揮する騎士の能力は主役ではないのである。また、指揮官であるガルガンチュワ、歩兵隊長であるジャン修道士の連携と同時に、砲火と歩兵の連携は歩兵の

前進に欠かせないものであった。敵の火砲により歩兵の進路が塞がれないように歩兵隊の前進速度に合わせて砲火を放つ必要があったからである。

「修道士は、自ら包囲していた側面が手薄になり、見張りもなくなったのを見ると、大胆にも城に進み寄り配下の数名とともに城壁の上へ登りつめた。正攻法で正面から戦うよりも、突然現れて不意をうつほうが、敵に対して恐怖と混乱を与えると考えたのである。しかしながら、万一の場合に備えて城外に残した二百名の騎兵隊を除き、部下の兵士たちが全部城壁に登りきるまでは、声を一切あげず、全部に登りきったところで、修道士は部下の兵達と一斉に大きな鬨の声をあげた。そして、この城門の守衛兵をなんの抵抗も受けずに殺害して扉を開き、待ち構えていた味方の騎兵たちを導き入れ、全軍あわせて東の門めがけて勇んで馳せつけた。大混乱の東の門に着くと、背後から全力で敵に突撃をかけた<sup>(39)</sup>。」

ここでも、二つの点で従来の戦術が否定されている。まず、正面突破の否定である。ジャン修道士は、フランス重騎士団のように敵陣に正面から突撃をかけていく戦術が火器の前ではもはや通用しないことを知っていた。「正攻法で正面から戦うよりも、突然現れて不意をうつほうが、敵に対して恐怖と混乱を与えると考えた」彼は、率いる歩兵たちと敵陣に到達して通路を確保すると、「万一の場合に備えて」いた独立行動部隊の騎馬隊を導き入れ、敵陣を蹂躪する。

もう一点の重騎士の否定は、個々の勇猛さの否定であり、連携の重要さの強調である。ここにみられるのは、優秀な指揮官のもとでの規律と連携が重視されている点であり、中世重騎士団の攻撃のように個々の騎士の勇猛さに依存しないのである。中世までは、騎士は自らの勇猛さを示すためには、指揮官の命令を無視することは当然のことであった<sup>(40)</sup>。しかしながら16世紀の戦場においては、全ユニットが高い機動性をもって司令官の指揮通りに動くのである。

このように、16世紀初頭、マリニャンとパヴィアの二つの戦いの間で、わずか10年の間に、兵器・戦術の変化が引き起こしたもう一つの変化が指揮官の資

質であった。戦術能力、戦場での判断能力が、武器の扱い、勇猛さよりも重視されるようになったのである。パヴィアの戦い以降、戦いの目的は、J.-M. サルマンが指摘するように<sup>(41)</sup>、常に主導権を握りながら敵を破壊し、かく乱し、圧力をかけ、分散させ、殲滅することであり、指揮官の第一の資質は、勇猛さでも騎士道精神でもなく、狡猾さなのである。指揮官に求められるのは、手持ちの兵力をいかに臨む戦術に適合させるかとなったのであり、合理性が求められるようになったのである。

## 結論

ここまでラブレーの作品の中の戦闘描写をイタリア戦争の近代軍事革命になぞらえて読んできた。ラブレーの作品の中の様々な軍事用語、描かれる戦術が、誇張したスタイルの中にも極めて史実に忠実であることがわかる。フランソワ I 世の命を受けたデュ・ベレー卿に付き従ってフランスのスパイとしてイタリアを往復し、イタリア戦争での戦術の大きな変化にも立ち会ったラブレーの作品には、文学が現代的に賦課された意味合いとしての虚構の概念とは異なり、軍事的歴史的資料としての価値を見出すことができる。近代の入り口における生き証人として、その学際的博識に裏打ちされた史実の詳細を空想的表現の中に織り交ぜたラブレーの作品は、16世紀の文学研究に従事する者が、歴史研究との境界が曖昧なままに *seizièmist* (16世紀研究家) と言われる理由を強く提示し、同時に、その作品には文学研究という、当時には存在していないジャンルを超えた多角的アプローチと、必然的に文学を超えた結果が要求されることを示してくれる。

## 歴史的考察：Isomorphisme militaire 近代軍事革命と西洋のアイデンティティーとしての軍事的同一性

軍事的考察の視点からは、火器の発達をもたらした近代軍事革命を作品からなぞっていくことになった。繰り返し行われたイタリアおよび今のオランダ・

ベルギーを構成するフランドル地方をめぐるフランスと神聖ローマ帝国の争いは、西洋文明に二つの根本的な変化をもたらすこととなった。一つは、社会構造の変化であり、火器の発明が騎士による突撃という中世の戦場を支配した戦術を時代遅れのものとし、必然的に、騎士としての軍事的優位を根拠にしていた封建領主の権力が失墜することとなった。

もう一点は、スペイン、イタリア、ドイツ、フランスという主要国が深く関わったイタリア戦争を通して、各国の軍事的・戦術的同一性が西洋諸国にもたらされ、西洋というアイデンティティーを生み出す契機となったことである。

中世までは、キリスト教共同体の意識が台頭するオスマントルコの脅威に対抗する求心力として機能していたが、イタリア戦争でフランソワ1世がカール5世に対抗するためにオスマントルコと同盟を組むことが象徴的に示しているとおり、宗教改革の波はとりわけ1520年以降、J. Haleが指摘するように、「ギリシア正教の管区ではないヨーロッパを、カトリックとプロテスタントに二分する結果となった<sup>(42)</sup>」のであり、キリスト教共同体としてのヨーロッパの同一性が解体されたのである。

このアイデンティティーの危機において、絶え間ない戦争は戦術・軍事技術の革新をもたらし続け、互いに争いあっていたヨーロッパ諸国に軍事的同一性という新たなアイデンティティーをもたらすこととなった。兵器・戦術の大きな変化は、それが有効であると判明すると、ただちに敵に模倣される。こうして火器の登場と重騎士の無効化という新たな兵器とその運用戦術をお互いに取り入れることで、1494年の時点では大きかった軍隊間の戦力構成の不均衡が、1530年くらいまでには解消されることになる。繰り返される戦争を通して互いの国にもたらされた軍事的同一性なのである。

また貴族の個人個人の勇敢さ・技量に依存していた重騎士の戦力としてのばらつき・不均衡は、軍事近代革命の後に主力の位置を騎士からうばった歩兵隊においては規律によって解消された。そもそも歩兵といっても、もとは騎士の従士が騎士の「子供 = enfant」として戦場に従軍してきたものが、かつての主君の家臣であることをやめ、「歩兵 = infanterie」として戦場での主力部隊

となっていくのである。J.-P. メイヤー<sup>(43)</sup>が指摘するように、この下剋上によって封建社会が崩壊するのである。貴族階級の騎士ユニットがもっていた技量・美德としての勇猛さは、必要なかった。その代わりに平民の歩兵部隊には、戦術の合理性を追求する指揮官の下で、規律と機動性<sup>(44)</sup>が追求されることになる。

イタリア戦争が終わると、それまでの対外戦争で比較的平穏を保っていた国内において、イタリア戦争の終了を待っていたかのように、宗教戦争が一気に激しくなり内戦の様相を呈するようになっていく。この戦いは、宗教の戦いであると同時に、カトリックのヴァロワ家とプロテスタントのブルボン家の戦いでもあり、最終的にはブルボン家の勝利で次の17世紀に絶対王政の最盛期を迎えるブルボン王朝が成立することになる。

イタリア戦争ではヴァロワ家対ハプスブルグ家の争いであったが、宗教戦争はヴァロワ家とブルボン家の戦いであった。フランスを含む西洋はこのように宗教の対立と王家の対立が入り組んで常に分裂の危機にさらされながら、繰り返される域内の戦争を通して軍事的同一性を維持し続け、それが西洋というアイデンティティーを保証し続けたのである。

### 文学的考察：16世紀研究における文学的課題としての空間描写

一方、文学研究の観点からは、今回の考察はラブレーの作品を歴史的資料としてとらえて史実と照らし合わせたことによる軍事的考察が中心となり、現代的意味合いにおける虚構を前提とする文学研究とはならないだろう。歴史の観点から見た場合、「書かれたもの以外」を扱う考古学に対して「書かれたもの」を扱う歴史学は、書いた人間の視点に含まれる政治性その他のバイアスを排除しなければ、客観的史実にたどり着くことはできない。ここで、文学を歴史的資料として扱うことと、文学作品に見られる歴史的事象の描き方との間に、果たしてどこまで明快な境界線を引くべきであろうか。

とりわけ、虚構空間という近代文学特有の物語の在り方・捉え方に対して、16世紀は活版印刷により口承から読書へと物語の受容の仕方が大きく変容する



時代であり、物語における真実性が、「本当にあった出来事」を強調することに焦点を当てる真実性から、語られる虚構空間の緻密な構築（l'effet de réel<sup>(45)</sup>）に依拠する「本当らしさ、もっともらしさ（le vraisemblable<sup>(46)</sup>）」と同義の真実性へと変容していく時代である。この大きな転換期において、とくにラブレーのような博覧強記のルネサンス人が、虚構に史実を織り交ぜた作品を提示している時に、どこまで歴史的資料としての価値を見出すか、どこまで歴史的資料としての価値を否定するか、ここを曖昧にしたままの16世紀文学研究は、フランス文学研究の社会において、中世にも属さず、また17世紀以降の近代の流れにも属さない傍流に位置付けられてしまう要因ともなっている。

そうした背景を踏まえたうえで、あえてここから今回見てきたラブレーの作品の中から文学的テーゼを見出すのであれば、近代軍事革命によって戦場の時空間が広がったことと、作品における空間描写にどのような関連があるかを考察することができるかもしれない。ここまで見てきた戦闘描写は、絵画における遠近法が発明された時代、虚構空間における写実性の高まりを空間描写の変化にどのように見出せるかというような考察も可能であろう。かつてM. マクルーハンが、その「ゲーテンベルクの銀河系」の中で、ウィリアム・シェイクスピアの「リア王」から初めて文学の虚構空間に喪失点がもたらされたと主張したが<sup>(47)</sup>、その主張は理論的根拠を提示できたとは言えない。とはいえ、M.-M. フォンテーヌが指摘するように<sup>(48)</sup>、絵画・物語における認識論が双方向的に影響しあう中で、中世までの二次元的な表現が、16世紀から17世紀にかけて三次元的な表現を獲得していくという考えに反対はなさそうに思える。問題は、叙述的言説ではなく描写的言説の中での空間描写に対して、言語における「消失点」をどのように学問的に証明するかという方法論の確立にかかってくるといえるだろう。

しかし今回の考察では、ラブレーの作品の中の史実に忠実な軍事的側面に焦点を当てることが目的であった。フランス16世紀文学を代表する作家として位置づけられているが、ラブレーが巨人の物語を書き始めたのは本人が50歳になってからであることを忘れてはいけない。法律家の家に生まれて、修道僧と

して、医者として、そしてデュ・ベレー卿に従ってフランスのイタリアにおける諜報活動のスパイとして生きたラブレーが、人生の後半にさしかかった時に、我々の時代の意味でいう作家としての自覚もなく、文学的価値というものを意図して書いたものでもなく、ソルボンヌの検閲を潜り抜けるための政治的動機から虚構の形式を借りたという点も否定できないであろうこれらの作品には、ラブレーに貼られたレッテルである人文主義的な作家という先入観を持たないように、現代的意味合いでの文学などの学問領域を越えて、あらゆる角度からのアプローチが必要であり、その帰結として導かれる議論も領域を文学に限定するのは不可能であろう。

## 注

- (1) S.-C. Gigon, « L'Art militaire dans Rabelais », Extrait de la *Revue des Etudes rabelaisiennes*, 5<sup>e</sup> année, 1<sup>er</sup> fascicule, Revue des études rabelaisiennes, V, Paris, Honoré Champion, 1907, n° 52.
- (2) *Les grandes et inestimables chroniques : du grand et énorme géant Gargantua*, dans Francis Valette, édition critique de *La légende joyeuse de maistre Pierre Faifeu* de Charles de Bourdigné, Paris, Droz, 1972
- (3) M. Bakhtine, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et sous la Renaissance*, trad. de russe par A. Robel, Paris, Gallimard, 1970, 1993.
- (4) M. Screech, *Religion, morale et philosophie du rire, The Rabelaisian Marriage*, Londre, Cambridge University Press, 1958, traduit en français par Ann Bridge, *Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992 ; *Rabelais*, Londre, 1979, traduit en français par Marie-Anne de Kisch, Paris, Gallimard, 1992 ; *Rabelais et le mariage, Etudes Rabelaisiennes*, t. XXVIII, Genève, Droz, 1992.
- (5) M. Bakhtine, *Ibid.*
- (6) M. Huchon, *François Rabelais : Œuvres complètes*, Paris, Gallimard « Bibliothèque de la Pléiade », 1994.
- (7) M.-M. Fragonard, *Rabelais, Les cinq livres des faits et dits de Gargantua et Pantagruel*, Paris, Gallimard « collection Quarto », 2017.
- (8) M. Huchon, *Rabelais*, Paris, Gallimard, 2011.
- (9) M. Robert, *The Military Revolution*, Belfast, Sallman, 1956 ; G. Parker, *La Révolution Militaire : La guerre et l'essor de l'Occident 1500-1800*, 1976, trad. de l'anglais par J. Joba, Paris, Gallimard, 1988.
- (10) G. Parker, *op. cit.*, p.18 : « En effet, au XVI<sup>e</sup> siècle, la guerre était omniprésente en

Europe plus que pendant les autres siècles. C'est le début de la période qui fut « la plus extrême pour le nombre relatif des années de guerre (95%), pour leur fréquence (environ une tous les trois ans), leur durée moyenne, leur étendue et leur ampleur »

- (11) M.-M. Fontaine, *La Représentation du corps à la Renaissance*, Paris, Amateurs de livres, 1990, p. 2.
- (12) Voir B. Quillet, *La France du beau XVI<sup>e</sup> siècle, (1490-1560)*, Paris, Fayard, 1998, p. 12.
- (13) Voir A. Jouanna, *La France du XVI<sup>e</sup> siècle ; 1483-1485*, Paris, PUF, 1996, p. 4.
- (14) Beau XVI<sup>ème</sup>, 「美しき16世紀」という表現は、この政治的・文化的に安定した社会全体の繁栄期を指しており、ルネサンスという社会の1割未満のエリート階級の間でのみ共有された文化現象とは異なる意味合いで使われる。Voir B. Quillet, *op.cit.*, pp. 10-11.
- (15) B. de Monluc, *Les Commentaires*, éd. P. Courteault, Paris, Gallimard, collection « Bibliothèque de la Pléiade », 1964, p. 30-31 : Ils étaient les « ennemis jurez et envieux de la grandeur l'un de l'autre, ce qui a coûté la vie à deux cens mil personnes, et la ruine d'un million de familles ».
- (16) パヴィアの戦いにおけるフランス軍敗北の戦術的詳細については、 Voir R. Knecht, « Monluc et l'art militaire », dans *Monluc, d'Aubigné, : deux épées, deux plumes : actes du colloque Monluc, d'Aubigné, les événements en Aquitaine après 1560 tenu à Agen, Estillac, Casteljaloux, Nérac les 4,5 et 6 oct.1996*, Agen, Centre Matteo Bandello, 1999, p. 116.
- (17) Voir J. Black, *A Military Revolution ? Military Change and European Society*, London, Macmillan, 1991, p. 6.
- (18) ラブレーの生涯に関しては、出生も含めて諸説あり続けたので、最新のものに依拠する。Voir M. Huchon, *Rabelais*, pp. 10-11.
- (19) 本稿で引用されるフランソワ・ラブレーの『第二の書パンタグリユエル物語』、『第一の書ガルガンチュワ物語』に関しては、日本では1941年から手掛けられた渡辺一夫の名訳がその古典的文体にも関わらず不動の地位にあり、半世紀以上経って2012年に出た宮下志朗訳も渡辺訳に代わるできないまま現在に至る。本稿では註(7)のM. Huchonの版を使用する。F. Rabelais, *Œuvres complètes*, M. Huchon (éd.), *Pantagruel*, ch. VIII, p. 243-245. « Les impressions tant elegantes et correctes en usance, qui ont esté inventées de mon eage par inspiration divine, comme à contrefil l'artillerie par suggestion diabolicque. »
- (20) E. Garin, *L'Homme de la Renaissance*, Paris, Seuil, 1990, p. 13 : « Nous sommes à une époque de changements rapides dans les activités qu'exercent les hommes, et dans leur manière de la exercer. Il suffit de penser, à propos de la transformation des manières de faire la guerre, aux répercussions qu'ont eues les nouvelles

techniques de l'art de la guerre, les nouvelles armes et les nouvelles machines, d'une part sur l'architecture et, de l'autre, sur les armées, des condottieri aux mercenaires. On cite souvent les observations, perspicaces et subtiles, de Guichardin sur le changement radical de la guerre au quinzième siècle, et pas seulement à cause de l'introduction de la « fureur de l'artillerie ». Les défenses changent elles aussi les architectures des villes. Mais avant tout ce sont les armées qui changent et les manières de diriger les hommes, et les hommes eux-mêmes. »

- (21) *Pantagruel*, ch. VIII, p. 243-245 : « Somme que je voie un abîme de science. Car dorénavant que tu deviens homme et te fais grand, il te faudra issir de cette tranquillité et repos d'étude, et apprendre la chevalerie et les armes pour défendre ma maison, et nos amis secourir en tous leurs affaires contre les assauts des malfaisants. »
- (22) *Gargantua*, ch. XXXIX, p. 108 : « Feste Dieu Bayart ».
- (23) *Gargantua*, ch. XLIII, p. 117 : « (...) Tyravant, lequel coucha sa lance en l'arrest, et en ferut à toute oultrance le moyne au milieu de la poitrine ; mais, rencontrant le froc horrifique, rebouscha par le fer, comme si vous frappiez d'une petite bougie contre une enclume. Adoncq le moyne avec son baston de croix luy donna entre col et collet sus l'os Acromion si rudement qu'il l'estonna : et fait perdre tout sens et mouvement, et tomba es piedz du cheval ».
- (24) スイス傭兵部隊は、フランス革命まで常にフランス軍歩兵部隊の中核を成していた。当時は戦争の度に傭兵部隊がどちらの陣営にでもつくことがあった。Voir J. Jacquart, *François Ier*, Paris, Fayard, 1981, p. 83, p. 87.
- (25) L. Funcken, *Le Costume, l'armure et les armes au temps de la chevalerie. 2 : Le Siècle de la Renaissance*, Paris, Casterman, 1978, p. 14.
- (26) J.-J. Jusserand, *Les Sports et jeux d'exercice dans l'ancienne France*, première édition en 1901, Paris-Genève, Champion-Slatkine, 1986, p. 7.
- (27) J.-H. Hale, *Artistes and warfare in the Renaissance*, New Haven, Yale Univ. Press, 1990, p. viii : « During the period (from the mid-fifteenth to the mid-sixteenth century) covered by this book, the Art of War underwent important changes. Infantry, rather than cavalry, became the decisive arm. »
- (28) J. Jacquart, « De quelques capitaines des guerres d'Italie », dans *Passer les Monts*, p. 84.
- (29) *Gargantua*, ch. XXXIX, p. 108 : « Par dieu je vous metroys en chien courtault les fuyars de Pavye. Leur fiebvre quartaine. Pourquoi ne mouroient ilz là plus tost que laisser leur bon prince en ceste nécessité ? N'est il meilleur et plus honorable mourrir vertueusement bataillant, que vivre fuyant villainement? »
- (30) J.-P. Mayer, *Pavie, 1525 : l'Italie joue son destin pour deux siècles*, Le Mans : Cénomane, 1998, p. 38. : « l'armée de Charles VIII était composée de deux tiers de

cavaliers. A Pavie, en 1525, celle de François Ier n'en comportera plus qu'un cinquième. A côté de la cavalerie lourde, on emploie désormais des unités autonomes de cavaliers légers à la façon turque : ce sont les stradiots vénitiens ou les cheveau-légers français. Excellentes unités de patrouille ou de coups de main, ces cheveau-légers ne sont pas encore très efficaces dans la bataille elle-même ni contre la cavalerie lourde, ni contre l'infanterie puissamment armée qui demeure encore maîtresse du terrain et dont la puissance ne fait que s'accroître au détriment d'une cavalerie dont le rôle va en diminuant. »

- (31) *Gargantua*, ch. XLVII, p. 127. : « Les gens estoient quinze mille hommes d'armes, trente et deux mille chevaux legiers, quatre vingtz neuf mille harquebousiers, cent quarante mille adventuriers, unze mille deux cens canons, basilicz et spiroles. Pionniers quarante sept mille, le tout souldoyé et avitaillé pour six moys et quatre jours. »
- (32) J-M. Sallamann, « L'évolution des techniques de guerre pendant les guerres d'Italie (1494-1530) », *Passer les Monts*, Paris, Honoré Champion, 1998, p. 60.
- (33) *Ibid.*, p. 67.
- (34) 戦場における火縄銃とその銃手の登場は、1520年代に認められるが、当初は数的にはごくわずかであったが、ひとたび騎士に対する有効性が認められると、戦場での普及は早かった。Voir Monluc, *Les Commentaires*, p.34, *Escarmouche de Saint-Jean-De-Luz*, (1523, sept.) : « Il faut noter que la troupe que j'avois, n'estoit que arbalestiers : car encores en ce temps-là, il n'y avoit point d'arquebuziers parmy nostre nation. Seulement, trois ou quatre jours auparavant, six arquebuziers gascons s'estoient venuz rendre du camp des ennemis de nostre costé, lesquels je retins, parce que, par bonne fortune, j'esoits ce jour-là de garde à la porte de la ville, et l'un de ce's six estoit de la terre de Monluc. »
- (35) *Pantagruel*, ch. XXVI, p.306 : « ... en l'armée sont troys cens Geans tous armez de pierre de taille, grands à merveilles, toutesfois non tant du tout que vous, excepté un qui est leur chef, et a nom Loupgarou, et est tout armé d'enclumes Cyclopicques. Cent soixante et troys mille pietons tous armés de peaulx de Lutins, gens fortz et courageux : unze mille quatre cens hommes d'armes, troys mille six cens doubles canons, et d'espingarderie sans nombre : quatre vingtz quatorze mille pionniers ... »
- (36) D. MacCarthy, *La Cavalerie au temps des chevaux*, Editions Presse Audiovisuel, 1989, p.63 : « Les expéditions entreprises en Italie par les rois de France à partir des toutes dernières années du XVe siècle allaient entraîner une transformation radicale de la cavalerie française. L'allégement maximum de l'armure des cavaliers et la disparition totale de celle des chevaux développeront la création de compagnies de cavalerie légère dont les effectifs dépasseront ceux de la

gendarmerie d'ordonnance ; celle-ci, par fidélité à des traditions anachroniques, conservera tout son pesant armement défensif. Grâce à cet allègement, la cavalerie retrouvera la vitesse que son alourdissement avait rendue aléatoire, sinon impossible. »

- (37) Voir F. Lot, *Recherches sur les effectifs des armées françaises des guerres d'Italie aux guerres de Religion*, Paris, EHESS, 1962.
- (38) *Gargantua*, ch. XLVIII, p. 130 : « Par quoy se mirent en fuyte sans ordre ny maintien. Aulcuns vouloient leur donner la chasse, mais le Moyne les retint craignant que suyvant les fuyans perdissent leurs rancz, et que sus ce point ceulx de la ville chargeassent suz eulx. Puis attendant quelque espace, et nul ne comparant à l'encontre, envoya le duc Phrontiste pour admonester Gargantua à ce qu'il avanceast pour empescher la retraicte de Picrochole par celle porte. Ce que feist Gargantua en toute diligence et y envoya quatre legions de la compagnie de Sebaste ».
- (39) *Gargantua*, ch. XLVIII, pp. 130-131 : « Le moyne voyant celluy cousté lequel il tenoit assiegé, denué de gens et garde, magnanymement tyra vers le fort et tant feist qu'il monta sus luy et aulcuns de ses gens pensant que plus de crainte et de frayeur donnent ceux qui surviennent à un conflict, que ceulx que lors à leur force combattent. Toutesfoys ne feist oncques effroy, iusques à ce que tous les siens eussent gaigné la muraille, excepté les deux cens hommes d'armes qu'il laissa hors pour les hazars. Puis s'escria horriblement et les siens ensemble, et sans resistance tuèrent les gardes d'icelle porte, et là ouvrirent es hommes d'armes et en toute fierté coururent ensemble vers la porte de l'Orient, où estoit le desarroy. Et par derrière renversèrent toute leur force. »
- (40) J. Jacquart, « De quelques capitaines des guerres d'Italie de la réalité à l'image » dans *Passer les Monts*, pp. 85-86.
- (41) J.-M. Sallmann, « L'évolution des techniques de guerre », *Passer les monts*, p.80. Après cette phrases citées, l'auteur cite des phrases de Hélène Vérin dans sa *gloire des ingénieurs. L'intelligence technique du XVIe au XVIIIe siècle*, Paris, 1993, p.93-94. « Les véritables vertus d'un homme de guerre se révèlent à sa faculté de bien concevoir et entreprendre ses desseins, pour définir une conduite qui réduise l'incertitude, la difficulté tenant à la multiplicité des facteurs en jeu. »
- (42) J. Hale, *La Civilisation de l'Europe à la Renaissance*, 1993, Paris, Perrin, 1998, p. 5.
- (43) J.-P. Mayer, *Pavie 1525 : L'Italie joue son destin pour deux siècles*, 1998, p. 35 : « L'un des grands changements, c'est la férocité des combats favorisée par l'émergence des grands changements nationaux et l'emploi d'armes destructrices. Au début du XVIe siècle les états nationaux et les clivages idéologiques s'imposent. La féodalité est finie, la guerre n'est plus uniquement un sport réservé à l'élite

nobiliaire ou la seule occupation épisodique d'aventuriers sans foi ni loi. Chaque soldat désormais a conscience d'appartenir à un groupe, les uns sont espagnols et fiers de l'être, les autres luthériens, certains suisses. »

- (44) E. Werner, *Montaigne stratège*, Lausanne, Editions l'Age d'Homme, 1996, p.12 ; La guerre, explique Montaigne au chapitre II, 9, est d'abord et avant tout affaire de mobilité. Les combattants doivent donc pouvoir se déplacer rapidement dans l'espace, et à cette fin ne pas porter d'armes trop lourdes, susceptibles de les gêner dans leurs déplacements.
- (45) Voir R. Barthes « L'effet de réel » dans *Littérature et réalité*, G. Genettes et T. Todorov, (sous la direction de), Paris, Seuil, 1966, 1982pp. 81-90.
- (46) *Idem.*
- (47) M. McLuhan, *la galaxie gutenberg*, t. 1 et t. 2, trad. par J. Paré, University of Toronto Presse, 1962, Gallimard, Paris, 1977, pp. 44-47 : « Le Roi Lear est la première manifestation verbale, dans l'histoire de la poésie, de l'angoisse de la troisième dimension. ».
- (48) M. M. Fontaine, « L'Espace fictif dans l'Heptaméron de Marguerite de Navarre » dans *Libertés et Savoir du corps à la Renaissance*, Paradigme, Caen, 1993, pp. 345-362.

